

生物多様性いちかわ懇談会

第1回：2024/11/16, 第2回：2024/11/30, 第3回：2025/01/19

出席者：市民19名（20代～80代）、総合環境課

第1回, 第2回では、公募により集まった市民19名が北東部・北西部・中部・南部に分かれ、各エリアの「生物多様性の現状」や「担い手」・「外来生物問題」の解決に向けた取り組みについて、意見交換を実施しました。第3回では、それらの意見をもとに、各エリアのリーダー・サブリーダーが、市域全体の目指すべき将来像や取り組みの在り方について、以下のように取りまとめを行いました。

〈懇談会が考える市川市が目指すべき将来像〉

2050年に市川市で実現すべき生物多様性の将来像を次のように提案します。

『多様でたくさんの「土・水・緑といきもの」がつながった街』

『その価値を理解して、市民と自然が共生している街』

各エリアからの意見は、次のようにまとめられると考えました。

「市川市にある自然（土・水・緑といきもの）がこれ以上減少してほしくない」「自然の量だけではなく、中身や質も重要である」「多様な自然同士のつながり（コリドーやエコトーン）を確保していきたい」という“環境”に対する思い。

それに、「市民が生物多様性について理解し、自然を楽しむことで創り上げていきたい」「市民と市民、市民と行政がともに話し合い、地域戦略の思いを受け継いでいきたい」という“人”に対する思い。

よって、2050年に実現すべき将来像として、『多様でたくさんの「土・水・緑といきもの」がつながった街』『その価値を理解して、市民と自然が共生している街』としました。

〈懇談会が考える自然との関わりのあり方〉

第1回, 第2回の懇談会では、「子ども達が自然に興味を示すための取り組み」や「大人が保全・再生に参加するための取り組み」の2点について検討してきました。

第3回の取りまとめでは,”子ども“と”大人“について、密接につながったものと判断し、次のようなフレーズにまとめました。

『学校教育や地域での交流を通じて、“子ども”も“大人”もつながって、学び・楽しみ・話し合える場を維持・拡大していくことが望まれる』

これまで、市川市で行われてきた、学校における虫採りや米づくり、親子での観察会や体験会、農業ボランティア等の取り組みを、今後も継続し、さらに幅広い人・場所・取り組

みに拡大することが重要であると考え、『学校教育や地域での交流を通じて、“子ども”も“大人”もつながり、学び・楽しみ・話し合える場を維持・拡大していくことが望まれる』としました。

なお、時間の関係で外来生物問題についてまとめることができませんでしたが、第2回懇談会では外来生物について、増やさない・拡げない、正しい情報の周知、新たな外来生物については正確な情報を早期に収集し防除する仕組みを整備すること、在来生物や生態系を守る取り組みを行うこと、などが大切であるという意見が出されていたことを報告します。

北西部 リーダー

	北東部	北西部	中部	南部
そして、 【1】 たか。2050年 にどのような 取り組みをして いけば良いか	・真間川流域にミシシippアカミミガメがいない状態 ・緑が増えてほしい ・親子で利用できる遊具ではない自然の公園 ・田んぼを増やしたい ・ホテルが見られるようにしたい ・国分川調節池にもっと木が植えてある ・梨農家を守る ・大柏調節池緑地の周辺環境を良くする ・谷津を守る ・街路樹に郷土樹木を使う（バラだけではなく） ・広報、SNS、YouTubeで大町公園を紹介する ・デベロッパーへの必要な規制 ・落ち葉バンク	・北西部は緑と水が多い環境なのでこれを活かし、ビジターセンター、コーヒーショップ、歩きやすい遊歩道の整備（整備しすぎない） ・上記に行きやすいようにサイクリングロードなどの整備 ・ボランティアと市役所、ボランティアと専門家の協力体制の構築	・現在残る緑地や歴史的な部分を残してほしい ・街路樹を自然と共生できるように管理する ・ベンチスペースなどが無いので木と土があるスペースに小さい休憩所を作してほしい ・狭い土地に無理に木を植えずに、まとめて植えるスペースを作る。 ・緑地を守る ・現状についての反省。具体的な改善を目指す。 ・空地を生かしていけば良いと思う。 ・無理な枝切りはしない ・過去から現在の自然環境の移り変わりをデータ化する ・取組によって特になるような事（ポイント付与など）を取り入れる。（例：コンクリートから緑地にすると毎年ポイント、等）	・緑の多いエリアにしたい ・江戸川放水路を大事に ・塩田の復活、海苔の養殖 ・鳥や生きものがたくさんいる海 ・高齢化にも対応した街づくり。（高齢者から子どもまで） ・海、放水路、保護区の一体化した自然環境を作る
【2】 どの子ども も達成が 組み み を し て や い け ば 良 い か を 示 す た	・水と樹林と草地が一体となった場を増やす ・谷津を利用する ・幼虫のえさ場（木を植えて、カブトムシとか多様な虫のための場）があると良い ・イベントの実施（虫とりや「そこにあるもの」を食べるなど） ・小学生の子ども達に田んぼ体験をさせたい ・遊具がなくても工夫するきっかけをつくる	・環境整備をして水辺に入れる場所や自然にふれあえる場所を作る（虫取りなどができる環境） ・市川の自然を知ってもらう機会を作る（小学校の調べ学習、リーフレットやHP、観察会等） ・子ども主体で活動できる場所の創出	・勉強（食育等）を通じて学んだり安心して学べる環境を作る。 ・大人がまず自然を大切にする姿勢を見せる ・学校教育で教える ・身近な自然を守りそこで遊べるようにする（遊具などは無くても良い） ・YouTubeなどで自然で遊んでいるのをアピールする	・子どもが学校で学んだことを大人に教える ・子どもたちに船にのってもらい海の体験をしてもらう ・カキ礁を整備して子どもが安全に、裸足で歩けるような場所にする ・中長期的に取り組める事を取り入れる（例：高校生に地引網を月1で1年間引いてもらい調査を実施。その結果、生きものが好きになった生徒が増えた。）

	北東部	北西部	中部	南部
良な自〔 いる然3 かたを〕 め保今 に全ま は・で ど再自 の生然 よすに うる興 な取味 取組の 組み無 みをか を行っ しうた てよ大 いう人 けにが ば	・小林先生の話聞く機会があると良い ・子どもを主体として大人も一緒に楽しめるイベント（田植え等） ・市を含め大人がその地域の声を聞く ・住まいの周辺環境度をはかる ・知る場を作る	・SNSなどを利用し情報発信する。 ・保全は「生きものが好き」だけでなく生態系サービスが整うことで全員にメリットがある。 ・消防や庭関係の仕事などの訓練の場や他の目的（アートなど）などと結びつけると忙しくても参加しやすい。 ・子どもが参加すれば親も参加しやすい	・忙しくて興味を持てていないので皆で考える機会を行政が情報発信してほしい。 ・有名人を招き講演してもらおう ・子どもに知ってもらい大人に伝えてもらう。 ・自治体や保護団体が再生プランを立てる ・塩浜の計画をやめる ・植木の水やり、掃除ゴミ拾いなど手入れをしている人がいることを伝える ・身近環境破壊を見つけたら止めて保全してほしい ・特になる取組みを推進する。（例：グリーンカーテン、生ゴミ処理など） ・保全、再生ではなく、保全にしっかり取組み、壊れてしまったら再生、ではなく壊れないようにしていくべき。	・自分に得するものがないと大人は参加しない。ボランティアより利益のあるもの（例：潮干狩り、のり作り、塩作り等） ・子どもと一緒に遊べるもの ・楽しみ方を教える講座を行う（学べる、遊べる、楽しめる、食べられる） ・ボランティアで自然案内できる人を育てる講座などを実施する ・緑のみずがき隊は農家に土地をかりて田んぼをやっている。一緒にやりませんかと声をかけたら人が増えた。
そな〔 のつ4 たて〕 めい2 にる0 何の5 をが0 し望年 てまに いし外 くい来 必か生 要物 ががど あるの かような 状態に	・侵略的在来生物を市民が捨てないようにする ・外来生物とうまく共生する ・市民への啓蒙活動の実施 ・市内でのランク付（地域別）	・これ以上増やさない ・在来種を守る ・外来種を一部囲って飼育する ・外来種が広がってしまう前に対応できる仕組みがあると良い ・拡散を防ぐために侵略的外来生物の駆除の実施 ・市川市には外来生物の駆除をしている団体がないので、団体作り、回収や駆除の支援をする。 ・ゴミ拾いなどとコラボする ・初期に駆除したほうが低コストですむ	・外来生物が増えていない ・在来生物が生きられるようになっている ・外来生物について周知 ・減らす方法を周知 ・在来種と外来種について知る ・アカミミガメやザリガニを捕ったら専用施設に持ち込む ・緑のある場所を守る	・生態系の破壊がおこらないように見守る ・徹底して排除できるものは頑張らなければいけない（例：ナガエツルノゲイトウ） ・ザリガニ釣りができる場所をつくる ・外国人にも正しい情報を提供する。 ・人種差別にならないように正しい情報を提供する